

中学校国語科における文学的読解力の開発

ーテキストとの〈対話〉・他者との〈交流〉を軸としてー

学籍番号 199338

氏名 林大樹

主指導教員 成實朋子

序章 問題設定

読むことの学習では、文学的テキストに向き合う際に、〈解釈〉を言語化することが求められる。しかし、中学校現場において用いられている〈解釈〉を言語化するための〈分析〉の観点とは、「作り手」が、どのような「戦略」のもとに言葉を選び、表現したのかという〈語りの作為性〉を読むということにまでは到っていない。

本研究においては、「作り手」の〈語りの作為性〉を〈分析〉の観点として子どもたちに獲得させることを目的に、他者との〈交流〉を通じて、どのように文学的読解力が開発されるかという可能性を考究した。

第1章 テキストとの〈対話〉・他者との〈交流〉を

促進する方略に関する基礎理論

第1節では、文学的読解力の発達が、どのように捉えられてきたのかを確認した。

第1～2項においては、山元(2005)の「スタンス論」をうけて住田(2015)が描いた「読書能力の発達モデル」から、中学生の文学的読解力のありようを定位した。それは「物語行為」、つまり、〈語りの作為性〉へと目を向ける読みの力であった。

第3項においては、寺田(2012)の論を整理し、「テキスト」と「読者」のあいだに、教室にいる「他者的存在」を差し込み、読書行為を〈個人的〉な営みから〈社会的〉な営みへと捉え直す必要性、他者との読書行為や、既習テキストを差し込む意義を捉えた。

第2節では、〈テキストとの対話方略〉を定義し、その具体的内実を明らかにした。

第1～2節では、山元(1994)の読みの「方略」に関する論考や、バフチン(1996)の対話論、Hunt & Vipond(1985)の「point-driven-reading」概念をもとに、【〈作り手〉や〈語り手〉によるテキストの表現の仕掛けと出会い、「なぜそのように仕掛けられているのか」と問い、仕掛けに〈応答〉し、そのテキストの「要点(point)」を生み出すという一連の過程を意識的におこなう方法】であるという基本的な枠組を示した。

第3節では、住田他(2013)などの研究を整理し、〈テキストとの対話方略〉が他者との〈交流〉において、有効な機能を果たすことを確認した。

第4節では、住田(2016)の論を参照し、物語構造を作りなす物語の構成要素に目を向け、〈テキストとの対話方略〉として、どのような内実が想定されるのかを検討した。

第2章 基本学校実習における学習者の文学的読解力の実態と課題

第2章では、まず、教科書教材の教材研究をおこない、中学生が〈語りの作為性〉に出会っていく必要性を、系統的に示したうえで実践に用いる教材を選出した。

A中学校において、基本的な〈テキストとの対話方略〉を用いた学習指導をおこなった結果、特別な指導を行わない段階では、象徴的な表現を字義通りの意味で受けとってしまうという重大な課題が明らかになった。その課題の原因として、テキストを〈語られたもの〉として捉え、そこにある表現がすべて〈仕掛けられたもの〉であることを、学習者が意識できていないことも明らかになった。

第3章 発展課題実習における

授業実践および授業研究からみえた成果と課題

第3章では、第2章で指摘した課題解決の方途として、〈語りの作為性〉を読む学習指導の有効性を、二つの授業実践から実証した。

第1～2節では、A中学校においておこなった〈語りの作為性〉を読む学習指導の概要を示した。この実践では、〈語りの作為性〉を読むことの実効性は明らかになったが、他者との〈交流〉をおこなうことができず、他者との〈交流〉において、どのような読みが生成されていくのかについては、明らかにできなかった。

第3～4節では、その課題をうけて、B中学校において〈語りの作為性〉を読むことと、他者との〈交流〉とを組み込んだ学習指導の授業研究をおこなった。授業実践の結果、文学の学習指導において、〈テキストとの対話方略〉を用いた他者との〈交流〉は、①互いの解釈の言語化を支え合う機能、②不十分な解釈であっても、他者の解釈を生成する機能、③問い続け、問われ続けることによって、解釈を固定化せず、学習者が意味を生成し続ける場をつくり出す機能をもつことが明らかになった。また、〈語りの作為性（物語行為）〉を読むことは、①言葉の作用力に意識的になるよう促すこと、②物語世界構築のための表現の必然性への気づきを促すことが明らかになった。

終章 実践課題研究の成果と展望

授業研究を通じて、上記のような成果が示され、中学生に〈語りの作為性〉を意識させることによって、文学の読解力が拓かれる有効性を見出した。しかし、まだ、より明確に文学の読解力が拓かれることを明らかにするためには、下記のような課題が残されている。

一つ目は、系統的、長期的にわたる指導が必要になるという点である。中学校三年間、そして、小学校での学習までも見据えた系統的な学習指導が必要となる。

二つ目は、他者との〈交流〉に関する問題である。自己の読みを開示し、他者の読みを受け入れながら、自分の読みを修正することに対して、強い抵抗感をもつ学習者が存在する場合、どのように他者との〈交流〉を構築するのか。